症例報告

巨大口唇を呈した雑種犬の1例

大室農夫¹⁾ 永田雅彦^{2)*} 代田欣二³⁾

¹⁾大室獣医科クリニック, ²⁾ASC どうぶつ皮膚病センター, ³⁾麻布大学生物科学総合研究所

要 約

12歳齢, 避妊雌の雑種犬に下口唇の腫脹が生じ来院, 病理組織検査で種々の細胞浸潤を伴う肉芽腫性炎症がみられたが, 菌要素は認められなかった。免疫調節作用を有するミノサイクリンで治療したところ, 病変は約2週間で軽快した。ヒトの肉芽腫性口唇炎に相当する疾患が予想された。

キーワード: 肉芽腫性口唇炎, 非感染性肉芽腫, ミノサイクリン

はじめに

犬の口唇には感染症, 免疫介在性疾患, 腫瘍, 接触皮膚炎など様々な病態が関与するが, 口唇に限局した病変を呈する疾患は限られている¹⁾。その代表が色素異常を主徴とする免疫介在性疾患であるが, 口唇に広範な腫脹を呈す疾患の報告はない¹⁾。今回われわれは, 下口唇に限局した巨大な腫脹を呈した犬を経験したので報告する。

症 例

12歳齢, 避妊雌のシーザーとマルチーズの雑種犬が, 下口唇の腫脹を主訴に平成14年9月17日大室獣医科クリニックを受診した。下口唇中央からやや左側に下床と可動を有する紅色弾性軟の結節(約15 mm × 25 mm)を認めた。針穿刺吸引生検は血球成分だけであった。非特異な炎症を予想し, 経口プレドニゾロン

0.5 mg/kgで2週間治療したが増大傾向がみられ, 左下顎リンパ節の軽度腫脹も触知された。血液検査では軽度のALP上昇しか認めず, 下顎X線検査でも特記すべき異常は認められなかった。感染症, 腫瘍, 肉芽腫等の鑑別を目的として, 同年10月24日ASC どうぶつ皮膚病センター紹介受診, 6 mm パンチによる皮膚生検を実施した。

病変部病理組織像では真皮全層結合組織間に紡錘形細胞や類上皮細胞様細胞が増殖し, リンパ球浸潤も多数観察された。またプラズマ細胞や好中球の浸潤も認められた。表皮や粘膜上皮に特記すべき異常はみられなかった。PAS染色にて寄生体は観察されなかった。以上より, 非感染性肉芽腫性炎と診断した。

生検後アンピシリン・クロキサシリン合剤(ベテシリン, 明治製薬) 30 mg/kg BIDを1週間処方したがこの間皮疹に変化なく, 組織診断後に免疫調節作用を期待してミノサイクリン(ミノマイシン, ワイスリー武田) 1 mg/kg BIDを投与したところ, 病変は次第に縮小し約2週間で略治した。その後薬物療法なく1年間追跡したが再発はなかった。

*連絡先: 永田雅彦 (ASC どうぶつ皮膚病センター)

〒182-0012 東京都調布市深大寺東町1-3-2

TEL 0424-80-9342 FAX 0424-41-6095

E-mail: nagata@ra2.so-net.ne.jp

考 察

犬では口唇に限局した疾患に関する記載に乏しく、評価にはヒトの口唇炎を参考にした。本症の病因は多彩で、感染性、ウイルス性、接触性などがある²⁾。自験例では病理組織学的検査で異物や感染因子を認めず、生活様式から種々の接触刺激を多角的に検討したが、特記すべきものはなかった。しいて言えばソファやタオルを良く舐め、癖の矯正として硬いおやつを与えることが多かったようである。推測の域はでないが、舐性行動や固いおやつを食べる際に自分自身で口唇を咬む持続的あるいは反復する刺激が局所肉芽腫反応に関与していた可能性を否定することはできない。またヒトの口唇炎では、病理学的側面から捉えたカテゴリーとして、唾液腺性、形質細胞性、肉芽腫性がある²⁾。自験例皮疹の組織像は、ヒトに生じる肉芽腫性に該当していた。ヒトの肉芽腫性口唇炎は一般に成人の下口唇に好発し、持続する腫大は弾性軟の巨大口唇になる²⁾。皮表に病変は伴わず、組織学的には肉芽腫病変とともに浮腫やリンパ管拡張を認める²⁾。病因として遺伝的素因や細菌アレルギーの合併、さらに組織学的病因として脈管の機能的器質的異常、結合組織性肉芽腫も推測されているが、現時点では特発性として扱われている²⁾。自験例の組織像は脈管の異常所見に乏しく広範な浮腫を欠いていたが、臨床像を中心とした全体像はヒトの肉芽腫性口唇炎に最も合致していた。

本症は重大な病因のない肉芽腫性炎と判断し、治療として局所サイトカインネットワークの調節作用を有する薬物を選択した。ミノサイクリンは多様な消炎作用と免疫抑制作用を持つことが知られており、ヒトでは慢性関節リウマチやざ瘡の治療にも使用されている⁴⁾。自験例では初期に投与したプレドニゾロンが奏功しなかったにも関わらず、ミノサイクリン投与後皮疹が劇的に消退した。もちろんミノサイクリン投与時は、ステロイド使用時と病期が異なり、さらに投与前に生検を施行していることから一元的にこれら薬物の効果に優劣をつけることはできないが、犬の非感染性肉芽腫性炎症における本薬の治療効果に期待が持たれた。

今後同様の症例を集積し、病態の解析を含めた疾患概念の確立やヒト疾患との異同、さらに非感染性肉芽腫性炎症におけるミノサイクリンの効果やその作用機序について検討が必要と思われた。

Fig. 1. Clinical features of this case. Note erythematous swelling of the under lip.

Fig. 2. Histopathologic feature of the lesion. Note proliferation of macrophages and spindle cells with infiltrations of lymphocytes, plasma cells and neutrophils at the dermis. Bar = 100 μ m. H & E stain.

引用文献

- 1) Scott, D.W., Miller, W.H. and Griffin, C.E., 2001. pp. 103. *In: Small Animal Dermatology* 6th ed., W.B. Saunders, Philadelphia.
- 2) Burton, J.L. and Scully, C. Granulomatous cheilitis. 1998. pp. 3139–3141. Champion, R.H., et al. eds. *In: Textbook of Dermatology* 6th ed, Blackwell Science Ltd. Oxford.
- 3) Shapiro, P.E. Noninfectious granulomas. 1997. pp. 317–340. Elder, D. ed. *In: Lever's Histopathology of the skin* 8th eds., Lippincott-Raven, Philadelphia.
- 4) Eichenfield, A.H. 1999. *Curr. Opin. Pediatr.* 11: 447–456.

Swollen Lip in a Mixed Breed Dog

Tamio Omuro¹⁾, Masahiko Nagata^{2)*}, Kinji Shiota³⁾

¹⁾Omuro Veterinary Clinic, ²⁾Animal Dermatology Center, ASC, ³⁾Azabu University

Abstract: Twelve-year-old spayed female mixed-breed dog presented with a swollen lip. Histopathologic examination of the lesion revealed granulomatous inflammation with mixed cell infiltration at the dermis, but no infectious agents. This lesion was diagnosed as sterile granulomatous inflammation, and was completely improved with minocycline as an immunomodulatory drug. It is considered that this swollen lip might be equivalent to granulomatous cheilitis in humans.

(*Jpn J Vet Dermatol* 2004, 10 (3): 125–127)

Key words: granulomatous cheilitis, minocycline, sterile glanuloma

*Correspondence to: Masahiko Nagata (Animal Dermatology Center)
1–3–2 Jindaijihigashi Chofu, Tokyo 182-0012, Japan
E-mail: nagata@ra2.so-net.ne.jp